1DAY DRIVE 102

オーシャンブルーに魅せられて 三浦半島東海岸・観音崎ドライブ

梅雨が明ければ、日本の夏が始まる。海が最も身近に感じられるシーズンだ。アートな休日は海を目指そう。爽快なシーサイドドライブに、海をテーマにした展覧会鑑賞。さらに、オーシャンブルーに輝く海峡を眺めながら、ランチを食すれば最高だ。海は日本人が郷愁を抱く風景のひとつ。きっと素敵な夏の思い出が作れるだろう。

そんなプランに最適の展覧会が、神奈川県三浦半島の東海岸にある**横須賀美術館**で開催される。**会期は7月8日から8月27日まで**で、タイトルはずばり〝**美術でめぐる日本の海**〟。**司馬江漢、古賀春江、梅原龍三郎**など、日本の近・現代画を代表する作家たちが描いた各地の海辺風景がずらりと並ぶ。また、サントリー〝トリス〟のマスコットキャラクター〝アンクルトリス〟の生みの親で、船好きで知られたイラストレーター、**柳原良平**（故人）の代表作品『**貨物船のはなし**』の原画が展示されるなど、いろいろな船の絵や客船のポスターも見られる。さらに、大漁旗や鯨の玩具など、海の生活から生まれた造形的な民俗資料も紹介。アートだけでなく、日本人と海との深い関わりを感得させる展覧会だ。

そして、何よりも素晴らしいのが、美術館のロケーションである。横須賀美術館は三浦半島の東側、対岸には、千葉県房総半島の山並みと富津岬が目と鼻の先に見える。この2つの半島に挟まれた海峡は浦賀水道といい、東京湾と太平洋をつなぐ海の回廊となっている。狭いところでは海幅が6.7km余りで、美術館の前庭からは浦賀水道を行き交う無数の船舶の姿が間近に見られる。まるで〝海と船の絵本〟を開いたかのような光景が眼前に広がっているのだ。

三浦半島は地政学的にも重要な位置にあるため、日本史にもたびたび登場してきた。その最大の出

▲横須賀美術館　前面に東京湾と浦賀水道を望む屋上には背後の照葉樹の森に続く遊歩道がある

▲古賀春江 《海水浴》 1922年　和歌山県立近代美術館蔵

▲二代広重 《諸国名所百景　肥前五嶋鯨漁の図》 勇魚文庫蔵

▲ランチのパスタセット　サラダとドリンク付きで1300円

▲本館正面のイタリアンレストラン〝アクアマーレ〟 地元の新鮮な魚介類を提供　外のテラスではペットと一緒にお食事も　☎046・845・1260

▲〝へんなあみもの　203gow（にいまるさんごう）編（あ）んだ〜わーるど〟 編み物作家203gowが作った全長8m超えの巨大な立体作品を展示　会期：7月15日〜10月1日

▲IQテストキューブパズル（756円）

◀横須賀美術館オリジナルトートバッグ（410円）

▲正面入り口右手にあるミュージアムショップ　展覧会のカタログや絵はがき　海を見ながら美術館の楽しいオリジナルグッズをショッピング

※表示価格はすべて税込み

天使のアートな休日

神奈川 横須賀

海がお庭の美術館!!　この夏、ここに日が描いた海辺の風景が、眼前の青い海原

文・写真▶

▲観音崎の海岸は岩礁あり砂浜ありとバラエティに富んでいて磯釣りや海水浴が楽しめる

来事は〝黒船来航〟かもしれない。嘉永6（1853）年、ペリー提督率いる4隻の米国艦隊が浦賀沖に現れたことから幕末が始まり、日本が近代国家に変身していく。その浦賀も、ペリーが上陸した久里浜も、現在は横須賀市に含まれ、美術館からクルマで30分もあれば周遊できる。

海ばかりではない。美術館の三方を囲む陸上の景観にも注目!!　美術館は**県立観音崎公園**の一角にある。公園の面積は県下最大で70・4ヘクタール。敷地の大半は低いが急峻な丘陵地帯で、濃い緑に覆われている。**観音崎の森**である。この森はシイやタブを中心とした照葉樹の森で、葉の表面の厚いクチクラ層（主成分は蠟）が日光を照り返すために明るく輝いて見える。かつては日本中に照葉樹の森が分布していたが、昭和57年の環境庁発表では全森林面積の0.6％にまで減少。観音崎公園では、この失われゆく日本の原風景を遊歩道で楽しめる。また、森の中には明治時代に築かれた砲台や、太平洋戦争時の軍事要塞の跡があり、史跡散策も。海辺の丘には、明治2年に点灯された日本最初の洋式灯台〝**観音崎灯台**〟（高さ19m、現在の灯台は3代目）が屹立している。

この観音崎公園へは、東京・世田谷の第3京浜道路・玉川ICから横浜横須賀道路を経由して約80km、約1時間10分のドライブだ。通称・横横道路の終点、馬堀海岸ICを出ると、ヤシの木が植わったシーサイドロードに。そこから数分で目的地に到着する。

▲観音崎灯台　明治2年に竣工した日本最初の洋式灯台（現在は3代目）

平成19年に開館した美術館は、岩礁の海岸に面した斜面に立ち、前面には芝生の広場（海の広場）を配置した眺望が展開。建物は環境との調和を考慮した地下2階／地上2階建ての**本館**と、それに近接した細長い**谷内六郎館**で構成。両館とも外壁は淡青色の半透明ガラス張りで、背景の森の濃緑色とのコントラストが美しい。

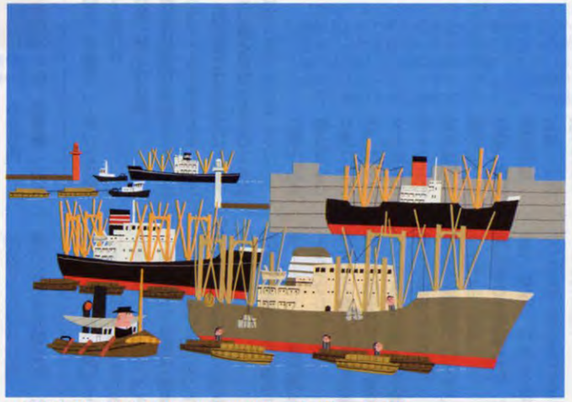
本館には地階と1階に計8つの展示室があり、〝美術でめぐる日本の海〟展は**1階**で。地下1階の展示室では、7月9日まで**所蔵品展 〝みんなが選んだベスト・コレクション〟**を開催し、7月15日からは〝**へんなあみもの 203gow 編んだ〜わーるど**〟展が開幕する（10月1日まで）。

週刊新潮の表紙絵を創刊から亡くなるまで描き続けた**谷内六郎**（大正10年〜昭和56年）の原画1300余点を所蔵する谷内六郎館では、海を描いた**表紙絵展 〝あの日の海の色〟**を同会期で開催する。

鑑賞後は海が一望できる本館屋上に。そこは山の広場という緑地につながり、背後の森に入る遊歩道が——。ここには懐かしい日本の海と森がある。CD

▲大漁旗 （第三源漁丸） 森庄平氏蔵

▲鯨玩具　勇魚文庫蔵



▲柳原良平 『貨物船のはなし』原画　2014年　個人蔵

■ドライブMAP

美術館ガイド

●平成19年に開館した市立美術館、近・現代の絵画、彫刻、版画など約5000点を収蔵。
【所在地】〒239-0813　神奈川県横須賀市鴨居4丁目1番地　☎046・845・1211　【開館時間】午前10時〜午後6時　【休館日】毎月第1月曜日（祝日の場合は開館）／12月29日〜1月3日／展示替え日　【観覧料】〝美術でめぐる日本の海〟展：一般900円／所蔵品展・谷内六郎館（〝編んだ〜わーるど〟展は所蔵品展）：一般310円　【駐車場】120台／1時間310円、以降30分につき150円。上限1510円。観覧者1時間無料　【アクセス】横浜横須賀道路の終点・馬堀海岸ICを降りて約3km、5分の行程